

今年の3月末に、兵庫県立大学理学部・大学院物質理学研究科教授を定年退職いたしました。1990年4月1日付で姫路工業大学理学部助教授として着任して以来、27年間に渡り助教授・教授としてお世話になりました。退職にあたり、何か卒業生や在学生にメッセージをとということで依頼されましたので、退職のご挨拶も兼ねて作文いたします。

1990年に着任した時には、播磨科学公園都市キャンパスの理学部の建物はまだ建設中でした。1年間は書写4号館4階を仕切って居室にして、新任の先生方が生活していました。1991年4月に理学部の建物が完成して自分達の研究室を作るときを想像し、必要な機器を発注したり講義の準備をしながら、期待に胸を膨らませながら過ごしたことを思い出します。夕方5時を過ぎると多くの先生方が仕事を終えて大部屋に集まり、ちょっとお酒を飲みながら研究や教育の夢を語ったりすることもできました。そのためもあって、同時に着任した先生方、例えば新免先生や渡辺先生、島先生たちとの間には、とても親密な関係ができたように思います。当時、4号館で生活した多くの先生方は既に退職しておられますが、何人かの先生方とは今でも一緒に食事をする機会があります。

私は、助教授時代は「物理化学 II」「物理化学演習 II」「物質科学基礎実験 I」「物質科学実験」を、教授になってからは「量子化学 I」「化学反応論」「物理化学演習 II」を担当しました。この中で、実験を除くと化学反応論は私の専門研究分野ですから講義をする上で問題ないのですが、他の科目についてはちょっと躊躇がありました。学生時代の私はあまり良い学生ではなかったのです(要するにあまり勉強しなかった)。大学院の入試面接でも、式の符号を間違えて指導教員の先生にたしなめられるというようなこともありました。しかし、今度は教えなくてはいけないわけです。そのための準備をしなくてはなりませんから、物理化学や量子化学を一から勉強し直しました。担当して初めの何年間かは、かなりヒヤヒヤで、その頃私の授業をとった皆さんはなんとなくわかったかもしれません。でも、教えるために勉強することによって、物理化学や量子化学に対する理解はずっと深まったと思いますし、その後の研究にも随分役に立ちました。また、「私の学生時代に教えてくれた先生は、本当にわかっていたのかしら？」などと考える余裕もできてきました。自分が教わった時に比べて、多少はわかりやすく講義をすることができたのではないかと思っていますが、その判断は卒業生の皆さんにさせていただかないといけません。

授業の理解度というのは、自分が学生だった時と比較するしかないのですが、私の教えた皆さんは概してよく理解してくれていたという印象です。もちろん、あまりできなくて単位を取ることのできなかった学生もいましたが、成績の良い学生は物理化学や量子化学については、少なくとも私が学部学生であった時よりは優秀であるように思いました。皆さんには、もっと自信を持っていただいて良いと思います。しかし、大学院に進学して専門が決まり研究を進める段階になると、「思ったほど伸びないな」という印象を持ったことも確かです。多くの卒業生は、博士後期課程に進学した後は就職が視野に入ってきて、研究に没頭するという人が少なかったように思います。また、私も含めた指導教員の責任もあると思いますが、博士前期から博士後期、博士後期課程の間に「もっと伸びても良いのに」と思われるケースもかなりありました。良くも悪くも、自分の限界を決めてしまっているように見えて、とても勿体無いと思いました。在学生の皆さんは、もっと「自惚れ」や「思い上がり」があっても良いのではないのでしょうか。

同窓会や卒業生の皆さんには、学部に対していつも支援をしていただきました。大学の予算が縮小している中で、図書、特に専門雑誌のバックナンバーの購入などの援助をいただき大きな支援になりました。研究室配属前に3年生と教員の交流を深めるための事業や、韓国の東亜大学校との交流事業への補助なども、学部や大学院の発展に大変有意義だと思います。また、私が理学部長をしていた2015年に、理学部創立25周年記念事業を行った時にも、色々とサポートをしていただきました。ここでも、御礼申し上げます。同窓会の活動も、卒業生が増えれば楽になるということは決してなくて、むしろ役員以外はその活動に無関心になっていくという問題があるようです。しかし、外国では同窓会という組織が学部・大学院研究科を物質的な面で支えていることが一般的です。これからも、ぜひ同窓会と学部・研究科が協力して、より良い学部・研究科にしていただけたらと期待しています。